

Title	人格存在に参与し合って生きる：福祉分化の広がり求めて
Author(s)	牛津, 信忠
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume27, 2012.3：72-91
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3915
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人格存在に参与し合って生きる

——福祉文化の広がり求めて——

牛津 信忠

はじめに

副題にあげている「福祉文化」という言葉は、人すべてに開かれた、自分自身の価値的な能力の実現（自己実現）へ向かって歩むための、個人および個人をとりまく精神的・身体的条件、物理的・制度的条件および人間の関係性等の条件のすべてを意味する。それらは人がその人らしく善や真や聖に向かつて生きるなかで、その人と行為を支える様々な条件である。福祉学に即して厳密にいうと、“人すべてに開かれた”という表現はさらに説明を要するであろう。少しく付言すると、それらの条件とは、現在、経済的・身体的・精神的等においてどのような状態にあつたとしても、その人の存在価値上の可能性を発揮して生きてゆけるようにしていく様々な福祉対応上の在り方すべてを意味する。特に福祉文化というときには、現在深刻な問題を抱えている人だけでなく人間すべてに対して上述の可能性への歩みを展開してゆこうとすることに力点が置かれる。⁽¹⁾

こう考えると、人と社会の抱える多種多様な生活上の問題群は、福祉文化創造のきっかけという貴重な時と場を

提供してくれる、またそれらへの対応姿勢や方途上の能力を高めめてくれるといえる。福祉の先駆者の方々が教示されたように、人の世の足らざるに投げかけられる光ともいえる。要は人を *exclusion* (除外) している状況を反省し、*inclusion* (包摂) へ向かって行為するわれわれの姿勢の如何にかかっているのであるが。

さらに生活上の諸問題の予防までも射程に入れて考えていくと、この福祉文化創造の歩みは人間の営みのありとあらゆるところにかかわりを持つてくることになる。

このように考えて、その根底部分のところに目を向けると、そこには、人がどんな状態に置かれていても、すなわち障がい、高齢化、災害による生活困難、人からの様々な要因による孤立等々が覆いかぶさって、人の人生が苦痛や破綻に近い状況にあったとしても、人それぞれが相互に大切に思い合い、その人の本当の姿を見出しその人の福祉的生存を信じてかわり続けるという行為の意味を知ることができる。また真の福祉への歩みを信じつつ、その方向を「これ」「それ」とは特定できなくとも、より良い方向という志向的可能性を探りつつ、それへ向かって共にあり、働きかけを続けるという行為の意味を知ることができる。

われわれは、その行為は、その人の本当の姿としての人格、それへの「存在参与」(その人の作用としての人格の存在性に参加させていた²⁾。人格の作用遂行「共遂行」) によってなしていくことができる²⁾と考える。

福祉文化とは、いふなれば、こうした意味を内包する行為が、人間の働きとして個々人の間柄の総体としての社会の中で具体化していくことでもある。これが「福祉の文化化」からまさに「文化自体の福祉化」といわれるようになる、つまり福祉形成という目標が人間の生活行動の中にしっかり根付いていく状態³⁾である。

「存在参与」という在り方

「存在参与」という抽象的表現を、人が人格に相互に参加し合って生きるということに焦点を合わせ、福祉の実際
に照らして考えていく。

一人の大学生の地域活動の実例

ここで一人の大学生の地域活動の実例をあげよう。これは人間の生活実態の中における相互的な人格へのかかわりの例であり、特に困難な生活上の問題を抱える高齢者へかかわり、その場に共生者として参与させていたただくという事例である。結果的に高齢者への福祉的対応が、小地域の福祉文化の広がりをつくり出したという意味では、社会的な広がりにもつながる例でもあるといえる。

大学生Aの下宿先は、身体が不自由な高齢女性（七五歳）とその娘（五〇歳）の二人暮らしの家庭であった。ある日突然にその娘さんが精神の疾患により入院してしまった。大学生と高齢女性の生活が始まり、大学生が寝たきりの高齢者の生活介助を余儀なくされることになった。

世話をしていた家族（一人娘）の入院のため、高齢女性は不自由な生活を強いられ、支え手もなく孤立しておられた。たまたまそこに下宿していた大学生Aは、はじめは仕方なくその方の生活にかかわり始め、次第に近隣の人々の支援のもとに生活介助の絆づくりが進んでいった。無理なく自然な住民同士の分担にその地区の民生委員の

方が関与し協力するようになった。しかし状況は好転しない。支え手の輪は広がったが、当の高齢の方の心の問題が大きく影響を与えていた。数週間が経過したが、高齢女性は食事も十分にとろうとされず、黙りこくった生活が続いた。そこで大学生は考えた。生活の中からの要求があるに違いない。それを発見し、それに応えていくことはできないか。そこに形づくられてきた地域的な関係の中で、高齢の方がみじめさを感じさせられる対応の在り方・状況はないかを内省しそれを乗り越えていく努力を始めた。

大学生（下宿人）はその人の喜びを周囲が喜びとする心の通う言葉かけや行為を模索した。人は孤独の中でも人の喜びを喜びとして感じる力を与えられている。苦痛はあっても、それを共に支え合って日々の喜びに変え、それをさらに生活の張りに変えていくことができる。そのように信じて支援行為の全体を傷つけない対応に変えていく努力をしていった。そのための人格尊重に留意する。そのような努力の継続の中で、その人の内側からの力の発揮への道がたどられ、喜びを共にするなかで信頼が生まれるという経過を経て、その方の心に開かれた様相が感じられるようになっていった。

地域のお祭りの日、その方が大学生に食事を作ってくれろという奇跡のようなことが起こった。その高齢の方が、台所に立って調理をなさったのである。その方は下半身が障がいのため不自由であり寝たきりであったが、台所まで言うように移動し、台所の調理台に取り付けてある引き出しを利用し、二段目、次に三段目と引き出してそれに肘をつき上半身を持たせかけて身を起こして立ち上がり、調理台の上部に体を寄りかからせる形で支えながら食事を作ってくれた、このことを大学生（下宿人）は後で知ることになる。加えて近隣の連携の広がりも充実度を増してゆき状況は好転していった。

こうした状況展開によって、寄りそってくださる個人・人々が創り出す小地域の力は時には家族の力を超えることを教えられる。人の人格に存在参与する努力の中で与えられた「共にあることのできるとき」について考えさせられる。その人のプライドとしてしか把握できなかった自我上の人格がまず目にとまるのであるが、しかしその人への真摯な心へのまなざし（これは見るというよりも心への参与を意味する）によりその人を理解していくプロセスの進行があり、その努力の中から人格存在の作用を看取できる。大きく可能性を開いていく自我を超えた人格、それはその人を統合している力であり、こうした人格存在の作用プロセスは限りなく前にある力に動かされ遂行されてゆくと理解できる。

さらにこの事例を通じて、人格の作用そのものである統合性は、人の心に愛が感じられた時に、その人の自我を超えた向こうからやってくる、ということも理解できる。決してわれわれが自分から作り出したのではない。その人に備わっていた統合性、その人を人として統一して自我の統合的な働きを可能とする作用力が自我を離れた向こうからやってくる、ということはこの大学生Aは知ることになる。それはそこに、生活上の問題状況の中にあつたとしても、可能性の連鎖として備わっていたその人の能力が、閉塞状況を取り去る諸条件を探りながらその人に参与していかうとする相互的に生きようとする傍らの人の存在とかかわりによって、自我の壁を突き破って表面化して、その人の人格に出会うプロセスが実現されると理解できる。

アメリカ映画にみる実例

前に示したのは、個人的で身近に接した事例であつた。次に映画などにも取り上げられ、一般性を与えられた実

例を取り上げる。

「路上のソリスト」というアメリカ映画に表現された統合失調症の方についての実話を取り上げたい。⁽⁴⁾

この映画は統合失調症という精神疾患を持つ音楽家と、その人の音楽的可能性を世に知らしめようとするジャーナリストとの相互のかかわり合いを取り上げている。時折暴力的にもなる障がいを持つこの音楽家は、路上で時にバイオリン、あるいはチェロを弾き、わずかな収入を得て生活をしている。この二人のかかわりの中で、終局的には、一人のソリストと、その傍らの一人の支援者がそれぞれに人格的に相互にかかわり合うことによって、ソリストが自己統一性へ近接していくという実話である。それは相互に自然に生き会う周囲の人々と、この人を本当に理解しようとしてくれる存在が共にいることによって可能になっていく。ここでは、その人の可能性を信じる人と、人格と人格とが触れ合うことが実現していく。本当に人を理解しようという不可能な行為であっても、それをなそうとする努力のプロセスが示されることによって、信頼や共感が生まれ、人が自分の本来の姿へ帰っていけることが示される。そこには人格的な相互関係が築かれていく。これはその人の存在に参加し、相互に人格的な触れ合いを持つ、まさに存在にあずかる、存在参与と表現することができる事実の例示である。

こうしてわれわれは、少しずつ、互いに人格を尊重し合って生き合うという「相互的人格主義」⁽⁵⁾の方向へと導かれることになる。相互に人格を大切に思い、相互に生き合うこと、それは実は特別なことではない。

それは本当の人格関係を求めるならば当たり前のことであり、その当り前さに気づいていくときに、福祉が日常の中に根づいた福祉文化のある社会、あるいは「文化の福祉化」へと近づいていくことができる。

人間存在の相互性の本質

いうまでもなく、人間は一人で生きているわけではなく、互いに何らかの関係を持ち合っていて生きている。親子、兄弟、友人、恋人、隣人、職場の同僚、様々な関係を持つて生き合っている。一人で孤独に耐えながら生きていると肩を張って見せたところで、山の中で仙人として生きる、あるいは、絶海の孤島に一人で生きている人であったとしても、実はどこかでみんなと共に生きている。相互的に生きている。仙人のような生き方あるいはロビンソン・クルーソーのような生き方をしていても、心の中のだれかと共にいるといわざるをえない、とすれば、やはり相互的に生きている。

ところでこうしたことに関連する言葉として、「間主観性 (Intersubjectivity)」（この段階では端的に「間柄の中に生きているところに人間の生きている姿の真実がある」という意味に理解しておこう）という言葉がある。要するに人間が相互性を持つて、存在の底から共存している。共に生きていることを意識していなくとも、共に生きているのだという。そのことを念頭に置いて考えていかないと人間も社会も、その真の状況を理解できないであろう。

ここで、デイビッドソン (Donald Davidson) という人の著書 “*Subjective, Intersubjective, Objective*” における議論を部分的に取り上げてみよう。

彼は、その著において、(客観性の究極の源泉を探ると) 人間は個人として存在しているのではなく、人間は相互に存在し合っており、「間主観性 (Intersubjectivity)」のもとにあるという。彼は続けて「人が考えることも一人で

考えているようで、人との関係性を前提に考えている。コミュニケーションをとりあうことも、当然、二人或はそれより多くの存在が多かれ少なかれ同時に応答しあっているという事実依存している」と。そこで、何事も相互に作り合っているということをしっかりと見つめないと事柄の真実は見えてこない。相互に存在し合っている何か、何事かがあるということ自体の中に客観的事実が発見できる。「間主観性」の中にこそ客観がある、とデイビッドソンはいう。⁶⁾

一人ひとり切り離すとそれは嘘の存在になってしまう。母と子、父と子とまたその母と父等々。家族の関係性においてほまさにそういえるが、もっと広くすべての人間存在が相互関係の中で個人個人をまさにその関係性の中で維持している。とするならば、「人間存在をそれぞれ切り分けて、その個人を対象化して見極めることは誤りであるとともに、それは不可能である」ともみえる。人間相互が関係し合って生きていることこそが、その関係性こそが、生きている客観的事実である。

しかし、デイビッドソンがいうように相互存在としての人間存在ということは納得できても、果たしてそれだけで人間存在の存在性の説明となりうるのであろうか。

相互存在は理解できても、それで、人間存在の相互性の本質領域を明らかにしたことはない。

ここには、人に接するとき、あくまでも物を見るように捉え、心を持った流動的な人を捉えることができず、偏った部分を全体として考えてしまっただけという疑いが浮かび上がってくる。さらに、この見方では、対象化して把握できる領域の人と人の間をしか捉えることができない。確かに、それによると相互に切り離すことができない人間の存在について部分的には理解できても、先の実例のような何かを求め、信頼を創り合って前方志向的に状況を乗り越えていく目的を持った歩み、個的な内面の歩みを説明できない。個人が相互性の中に解消されてしま

い、個人としての目標や価値を持った人格としての姿が明瞭になされえない。人格にその存立を信じてかかわりを持つていくというような働きかけの解明がここでは不分明になりかねない。

このように相互性を深く捉え、人の持つ本當の姿と人と人の相互性、その人自身と共にある人々との本當の關係性といった相互的人格性の關係性の本質領域を念頭に置き続けるためには、さらに整理をした形で議論を進めていかねばならない。それは、その人の主体性と共にある主体の關係性にまで及ぶことになる。その主体へいたる議論は、人間を物（客體）として捉える在り方を超えて、さらなる本當の「あなた」を見つめようとする在り方にまで達してゆかねばならない。それは人の眞の姿、人格の眞實の姿を明らかに示すことによって可能になる。

次にわれわれはマックス・シェーラー (Max Scheler) の、こつしたことに關する考え方を見てゆくことにする。シェーラーは間主觀性という捉え方をフッサールに次いで究明してゆき、完成度高く、われわれに開示してくれた人である。

彼の間主觀性ならびに「間人格的」關係についての解明すべき諸点を抜き出してゆく。

人間の根底に視点を当てると、そこには日常的に与えられている人間の体験が前もって与えられている、自己と他者とに分化する以前に見られる自己に共通な根源が考察の原点としてあるといえる。今ここにいる私たち個人は、これまでの人類の歴史的な存在の中で様々環境から、人々から、周囲のすべてから創られてきた様々な在り方を蓄積し、共通の在り方を根つこの部分で持ち合つて生きている、と考えることができる。

そうしたシェーラーのいう「*自他未分化の体験流 (indifferenter Strom der Erlebnisse)*」が根源的心の領域に存在することに注視して、したがつて「*自他に共通な根源*」、まさにそこから人間を見ていくことが問われる。

基本的には、人は自他に共通な部分を持って生まれ、個人としての人間がその後の環境要因の中での成長によって個人としての特性を持った存在になってゆき（遺伝的とされる事柄も体験の記憶として理解）、そうして、その人の個人的特性を持った存在になってゆくと理解されるのだが、シエラーは、そうした共通項を持った存在と周りの影響によって創られた特性ないし性格領域を自我領域としてひとくくりにする。

さらに、その人の可能性、潜在性をも含めて理解を広げてゆき、それを持つさらに高次の「これ」と指差すことのできない人格を、人の持つ本当の人格として、見えない部分の人格にいたるまで理解していこうとする。

すなわち、シエラーは、対象として把握される自分自身としての自我と、この中には、われわれが把握できる日常的にいう「性格」という人格部分を含んでいるが、こうした把握できる人柄、性格、個性、保持する道徳性という人格部分と、把握できないその人の可能性として備えられている人格の部分を両方総合的に捉えようとする。

シエラーはこのように幅を持った論理を提供していると理解できる。すなわち、「自我」とはどこまでも実験科学的な考察の対象であり、人間の知覚によって捉えられ、対象化・客体化される。したがって知覚不可能な主体的な意味をそこには有していないのである。われわれはこの自我領域を「自我論上の領域」と表現する。またその中にある性格、個性的、個的統一領域を自我論上の人格と表現する。

それに対して、その人の中心的精神領域の「人格」は事物や自我が対象化されるようには対象とはならない。それは前述したように「『作用』」であり、しかも多様な人間の作用を統一的にまとめる『作用中心』である」として、「人格」について（現象学的な）説明と記述がなされるのである。それが人に統一を与え続ける人格だとされる。すなわち、こうした原理的説明により、「行動に作用統一を与える作用中枢が人格である」という人格の根本特性がいつそう明らかにされていくことになる。⁸⁾

その自我を超えた人格の「作用」は、対象化することができない。しかし、シエラーによると、それは「存在参与」と「共遂行」として理解へと到達していくことが可能であるとされる。他者の人格に対する認識も「共遂行」を通してなされる「存在参与」を基本とする「理解」によるとされる。⁹⁾

この議論のさらなる理解のために、前に述べた在宅の高齢者や統合失調症の方の事例に加え、このシエラーの見えない、対象化し捉えることができない人格への「存在参与」という行為の共なる在り方について、ある家族の現在直面している現状を語り、これまでの議論を振り返りながら考えることにする。以上の人格認識をベースにすることによって、先の実例提示の時点より一層人格の本質に即した理解が可能となるであろう。それによって、相互的人格の連動によって生まれた相互理解、そして人格同士の参与の可能性へと理解をさらに進めていくことができる。その統合性こそ人格中枢、その人の主体性そのものであるとシエラーは捉えている。

ある特別養護老人ホームと家族とのかわりについての実例として、認知症を患った高齢の女性（九六歳、特養で生活）から教えられたことを取り上げる。

そこには、老人ホームの中での恵まれた生活があった。しかし、日々の生活における充足があるにもかかわらず、「人格的存立にとっては」欠けてしまうことが生じてしまう。福祉施設における援助技術の専門性の枠組みで捉えうることで、捉えきれないことがあるが、このことの錯誤により、どうしても深い次元のニーズに不充足事態が生じてしまう。援助技術とは、専門職により特養の利用者へ温かい働きかけがなされたということに尽きるのであるが、自我上の個人に対する働きかけの限界が拭いきれない。認知症の人は、人格が本当に消えているのか？ 物象化した働きかけに終わってしまいかねない諸条件の制約はないか、制約の範囲内でその人への本当のかかわりを

創っていけるのか、見えない人格の可能性を見失ってしまうことは如何ともしがたいのではないか、等々の疑義がわいてくるのである。

こうした現実に対して、相互にその人の見えない部分に包み込まれている可能性を信じて共にあるとすること、見ることでできない人格をも含めて、相互的に人格を大切にしよう、見えないその人の中心といえる人格の大切さを思い、共にあるとすること、が「存在参与」である。それは、その人の中心に参与させていただくことそのものである。

したがって、人格は他者に向かい対話的に自己を開示することによって他者の存在参与を可能にしている。ここでの事例のような認知症の方にもそのような条件を創っていかねばならない。

この事例の女性は、九六歳という高齢で、話すことも、体を動かすことも、食べることもできない状況であった。何度も、施設側から、命あるうちにと、身内の招集が告げられる状態であった。そうした中で、家族によるこれまでの取り組み以上のかかわりがなされるようになった。家族が毎日、時間を得られるときに訪れ、寄り添いがなされていった。家族はそれぞれ子供のころの母親について語り、またクリスマスチャンであったその人の好きであった聖句を読み聞かせ、何度も讃美歌を耳元で、さらには家族の合唱で歌った。さらに語りかけ、その人が好んで食していた食品を思い出しては口元に持つていくという行為を繰り返した。ある時、孫娘が讃美歌を声量一杯に施設中に響けとばかり歌い、歌い終わった後、その女性は掛布団の下の手を両手とも出し、手を合わせ、そうして、両の手でもって拍手を始めた。それは音のない拍手であったが心に響く拍手となった。

この出来事は、専門ワーカーの関与に加え、家族が精一杯に日々の生活条件の中で、その人の人格の中心を受け

止めそれに存在参与し続けた結果、生じたということである。

その出来事をきっかけにこの認知症の高齢の女性は次第に周囲の人に向かって心が開くようになり、行為にも変化が見られるようになった。顔には表情が戻り、食事もとれるようになり、顔に時折笑顔も見られるようになっていった。何度もこの状態を繰り返したが、次第に車いすでの行動も可能になり、食事も他の人々とともにとれるようになってきている。九七歳のバースデイを祝い、現在においても健在である。

相互的關係性の「広がり」の場

これまで議論してきた、シエラーの人格論は、決して人格を個人人格だけに限っているわけではない。彼の方からすると、人格は共なる存在性を維持する道徳的主体としての側面を有し、個体においてとともに、同時に「共同活動者」、「共同責任者」等という共同存在としても存在している。そうした共同体験の全体における体験の中心を、シエラーは、「総体人格」と呼ぶ。社会的人格やコミュニティを作り上げる人格の根底にこの存立があると思える。あらゆる有限的人格は個人人格であると同時に総体人格の成員である。個人人格であると同時に総体人格でもあつて共同性を保持するのである。¹⁰⁾

さらにシエラーは、総体人格を超えた人格としての「秘奥人格」をも示唆している。その秘奥人格とは愛に開かれた人格という言葉で表現できる。愛に開かれた人格として、愛の包摂という下部の存立体を包み込む働きと、包み込まれる存在のその受容力の高度化の程度に応じて包み込む力を増すという形で、相互的人間存在の在り方、すなわち深い次元から、見えない「あなた」の可能性を信じその可能性に参加させていたがながら共に生きると

いう生き方が広がりを持つて成立していくことになる。その志向的方向づけは垂直次元からの力であり、それにより人格上の統一が生まれる。¹¹⁾

こうした人格は、人間自らが、自己との関係で関係を持つことはできても、自らが作り上げるといふものではなく、むしろ自らを上方から統一している力としてシエラーは把握している。すべての人にまさに備わっており、それを信じかかわっていくときに、それは周囲に人格として理解されるようになる。さらにその広がりには、個別人格にとどまらず、総体人格、秘奥人格と広がりを持つ¹²⁾。

このようなかわりのもとに広がりを持つということを念頭に置き、福祉というより具体的に踏み込んだ考察をするためには、「広がり」の場」ということを論題にあげ、議論に密度を加えていくことが必要になる。

矛盾的統合性に至る「相互的包摂の場」

これまでの見方に基づき上記の具体を加味してゆくと、人間が内的に奥深くから共に生き合っていくそうした場を創り合うという、生き合う中で存立していく「場」の理論、すなわち地域社会の共同性、コミュニティ、等々に ついての議論の底にはこの「場」があるといえるが、そうした道が開かれていく。

われわれがここにいおうとする「場」とは、相互に主体性を保持しながら、あるいは主体性へと近接しながら、他者を包み込み合う、あるいは他者を包摂しようとする、という横の領域の間主観的な作用が縦の主体性の階段状の層に添って存立していくという間主観的段階を縦と横の相互的関係性として作用展開していく作用連関である。¹³⁾

これまでの議論を振り返ると、見えない世界と見える世界の同時存在、さらには自他の未分化を基底に置いてい

ること、さらに相互に異なった存立体である人間存在をも統一的に理解しようとする等の矛盾とも思える状況を議論の中に放置している。さらには現実の実証的自我次元の理解と形而上学的理解の接合という矛盾の同一化の放置が感じられるかとも思われる。

ここで「通徹 (Durch)」ないし「互通」というフィヒテ (J.K. Fichte) がかつて説いたことを想起して付記しておきたい。それは「見られる限りは矛盾し合うが、それが生きられていく限りは、互いに浸透し合い、生ける統一を形成する」事態に他ならない。人間が言葉で表現したり、現実の状態として把握しつくそうとしても把握することができない、ともかくそれを生きてみないとわからない。¹⁴⁾

右にあげた「場」もこのような性格を持つ。相互に異なる者同士が包摂し合うというときに、矛盾し合う状況や人の相互関係性が作られる場がそこには成立している。

これは現実の中で多くが感じ取っている自他の中に見出すことができる。理屈の上ではこうだと断言されていても、どうも心で受け止めるとおかしい。しばらく時間を経ると理屈のほうが間違っており、感覚的に正しいと思っていた道にたどり着く。また理屈では説明できず矛盾を感じるが、生きていってみるとそれが正しかったということがわかる。このように現在のには相互に矛盾しているという理論上の問題を感じても、その矛盾と見える相互が明確な関係性を持っている道筋が実はあるという「互通」存在の生きられた結果としての明証性を、ここで表明して確認しておきたい。

ところで「トポス」(Topos) という古代ギリシャ時代からの言葉がある。「場所」という意味に近い。

生きてゆく行為の進行は人間の主体的な生の展開そのものである。アリストテレスの「自然学」によると、それ

それぞれの段階ないし次元において、「トポス」とは、そうした包み込みの「核」として包摂体の全体に関係性を浸透させ力を及ぼさせていき、そうしてその及ぶ領域の全体を注視してみたときに、その状況そのものは場所ということになる。それは統合作用の重要な要素であるとともに、それが影響を及ぼす次元（の場）をたどって包摂性の密度と広がりを増してゆく力でもある。トポスとは、そうした状況のダイナミズムの核として表現されていく。そうした力の作用する場所といえる。¹⁵⁾

こうしたことをわれわれが福祉実践上のプロセスに照らして理解し、特にその援助技術の実践という実体に照らすときに、明瞭に具体の次元での把握が可能になる。

個人、集団、社会ないしコミュニティ、さらにはそれを超える諸次元において、ワーカー／クライアント関係という一般的援助技術の関係を例に一言しておく、両者のかかわりは上述の議論の流れの下に捉えるならば、支援者と生活問題を抱えた人という形体としての類別を越える、ないしその類別の否定から始まる存在の本源にある相互性に帰ることがなければならない。

両者の協働としての志向をそれぞれの立場において探るといふ条件形成においては、いくつかの専門技術的な対応が必要であろう。それも相互主体的に、相互の人格的協働を探る道に立つときに、互いに主体として統合性を損なうことのない、条件的整備を進める形で参与し合える間柄を構築してゆくことが必要である。それによって物化的対象化（単なる物として対象化する）を避けることができる。かえって相互主体的な包摂関係とそれを基盤とした高揚する人格への参与が達成されていくことになる。

こうした高揚する統合性への段階的積み重ねの各状況を、われわれは社会福祉におけるトポス情況ないし全体的俯瞰のもとに「トポス」と呼ぶことができる。

それは相互的包摂の場であり、より具体的に踏み込んでいうならば、まさにそうした場は多くの人々に開かれ、人々の訪れを待つ地域の日常の中に広く深く備えられ、そこから生活が出發していくことが求められる。「ソーシャルワーク協働の思想——「グリナー」から「トポス」へ」¹⁶という方向性のもとで地域の中で問題を乗り越える（われわれの視点からすると「Recover」（本来の自己への帰還）といえる）場をトポスとして捉えていこうとする柏木昭教授の思想はこの具体をよく表現している。

最後に、社会福祉上のトポスが、本当に相互的ないし間主観的トポスであるためには、福祉文化が広がりを持たねばならない。福祉文化とは、「自己実現をめざしての普遍化された福祉の質を問う中で、文化的な在り方を実現する過程およびその成果、民衆の中から実現された文化」（一番ヶ瀬康子、福祉文化学会の創設者）¹⁷ともいわれる。われわれは、福祉文化を、「人すべてに開かれた自己実現ないし人の可能性発揮への道、そこにある個および個をとりまく精神的身体的・物理的・制度的条件の総体」として理解する。「根底には人間相互の人格への存在参与の連続がある福祉が文化化すること」である、という理解を総括的に示すことができる。すなわち福祉形成という目標が人間の生活行動の中につきり根付いている状態を意味する。

福祉が、また福祉的生ということがありうるのならば、上記のような営みから始まっていくといえる。Exclusionのないまさに真のInclusionが存在するからである。

われわれは、さらに、福祉実践の多くの実例の中に、こうした営みを探ることができるがここでは割愛する。

われわれは、相互に人格に参与し合つて前向きに生きていこうとする。さらに、前方をも見上げ、そこに与えられる道の意味を問い続けようとする。われわれは現実には置かれたここにしか生きようがないが、前方に開かれ、意味に従いつつ、生きることを許されている。

すべては、われわれの人格の在り方次第である。自我的人格に止まらない在り方が求められる。人格の本源に立ち返ること。見えない人格への理解を通じての存在参与を通じて、われわれはその許しの恵みを受け止めてゆくことができる。この存在参与の道のすべてが福祉の文化化につながる。

(1)ここに取り上げた一般に公表されていない過去の事例については、個人を特定化できるようなプライバシーに触れる事柄の記述を割愛している。また現時点の事例については当該家族の了解を得ていることを付記しておく。

注

(1)日本における「福祉文化」という用語の定立においては、一番ヶ瀬康子が、この分野の著書の出版、また学会設立をも伴い果たした役割が特筆されるべきである。

(2)マックス・シェラー『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学(下)』、小倉志祥訳、シェラー著作集3、白水社、二〇〇二年。人格存在とそれへの共遂行については次のシェラーの引用が理解を助けてくれる。「作用はけつして対象ではない。なぜなら、作用の素朴な遂行と並んで反省のうちになおこの作用の知がたとえどれほど存在しようとも、この反省は(中略)対象化しうるものを何も含んではないからである。たとえば、すべての内部知覚に特有であり、すべての内部観察にはいよいよもって特有であるような対象化は、その反省には含まれない」。この「作用の遂行うちに生きている人格がけつして対象でないことは当然である」。「人格の与えられる唯一無二の様式はむしろただ人格の作用遂行そのもののみ」「自分以外の人格が問題である場合には、人格の与えられる様式は、他の人格の作用とともに遂行するか、あるいは後から遂行するか、前もって遂行するかによってのみである」。三八―三九頁。

(3)一番ヶ瀬康子・河島修・小林博・蘭田硯哉(編)『福祉文化論』有斐閣ブックス、一九九七年、二七〇頁。

(4)『The Soloist』、日本語題名「路上のソリスト」ジョー・ライト監督作品。二〇〇九年、アメリカ映画。

- (13) 牛津信忠「トポス論の間主観的考察(その2)——社会福祉実践における「場」の解明のために」『聖学院大学論叢』第24巻第1号、二〇一一年、一四〇—一四一頁。
- (14) 新田義弘「深さの現象学——フイヒテの後期知識学における『生ける通徹』の論理」『思想』(岩波書店)一九八六年、No. 749、五—七頁。「通徹」Durchを限元忠敬は「互通」と訳している。
- (15) 牛津信忠「トポス論の間主観的考察(その1)」『聖学院大学論叢』23巻第2号、二〇一一年、七〇—七二頁。
- (16) 柏木昭・佐々木敏明・荒田寛『ソーシャルワーク協働の思想——「グリネー」から「トポス」へ』ヘルス出版、八七—八八頁。
- (17) 前掲、一番ヶ瀬ほか(編)『福祉文化論』、三頁。